



# 『ウィリアム・モリス クラシカルで美しいパターンとデザイン』

## 解説・監修 海野弘 パインターナショナル 2013

有用とも美しいとも思えないものを家のなかに置いてはいけない、  
ウィリアム・モリス『生活の美』(1880)

みなさんは、ウィリアム・モリスの名前を聞いたことはありますか？  
彼は19世紀イギリスのテキスタイル・デザイナーで「モダンデザインの父」と称されています。  
また、詩人、小説家、翻訳家、社会主義運動家としても大変有名な人物です。

幼い頃から豊かな自然に囲まれた大邸宅で過ごし、19歳の時には聖職者を志し、  
オックスフォード大学に進学します。そこでラファエル前派の芸術家と出会い、建築・美術・文学の  
世界に足を踏み入れます。26歳の時に、新婚生活を送るための新居「レッドハウス」を建てます。  
設計から家具、壁紙、カーペット、タペストリーに至るまでモリスと友人たちが手がけ、  
独自の世界観を具現化しました。後にその家は「世界で最も美しい家」といわれるようになります。

これを機に、仲間と共に“芸術と仕事、そして日常生活の統合”という理念を掲げた  
モリス・マーシャル・フォークナー商会を設立します。壁紙やステンドグラス、家具の制作など  
多岐にわたる仕事をデザインから製作まで一貫して請け負い、産業革命によって失われた  
クラフトマンシップを復活させました。1880年代になるとモリス商会と同じ理念を持つ工房や  
アトリエが各地に設立され「アーツ・アンド・クラフツ運動」へと発展していきます。  
その後、運動はヨーロッパから北アメリカへと拡大し、1920年には日本にも到達。  
思想家で文化功労者である柳宗悦や、益子焼の陶芸作家で人間国宝の濱田庄司らにも影響を与えました。

その後、モリスは社会主義運動に参加し、ケルムスコットプレスという出版社も設立。  
インキや活字デザインにもこだわり、モリスの「理想の書物」が刊行されることになりました。  
彼が考える優れたブックデザインとは、装飾のない書物でも建築的によいものであること。  
全体の美を意識し、1冊の本を1つの建築とみなす考えによって、数々の美しい本を残しています。

さて、ここまで紹介してきたウィリアム・モリスの展覧会が、京都・アサヒビール大山崎山荘美術館  
にて開催中です。主要なモリス作品と、同時代のデザイナーたちによる作品を合わせた56点を展覧。  
美しい暮らしを求めたモリスの生涯と、そのデザインの歩みを感じることができます。  
そしてこの美術館は、関西の実業家・故加賀正太郎氏が、大正から昭和初期にかけ建設した「大山崎山荘」  
を創建当時の姿に修復し、安藤忠雄氏設計の新棟「地中の宝石箱」などを加え、開館したものです。  
庭園も美しく、とてもすてきな美術館です。所蔵品も民藝運動ゆかりの作品群、モネの「睡蓮」など  
素晴らしいものばかりです。その中には先ほど出てきた柳宗悦や濱田庄司の作品も含まれています。

「民藝」についてはまたの機会にして...  
ぜひみなさんもモリスのデザインの軌跡を見に行ってみてくださいね。